

No.3005

自文化への参入を許容する論理

—他者が参加するニュージーランド・マオリの民族芸能をめぐる—

神戸大学大学院国際文化研究科

博士後期課程

土井 冬樹

本活動の目的は、ニュージーランドの先住民マオリの歌や踊りが、マオリという民族の枠を超えて実践されている現状を人類学的な現地調査を用いて調査・分析し、多文化主義社会において、他者による文化の利用が当該文化出身者に許容され拡大されていく過程を探ることで、文化の当事者と第三者とが和解する可能性を考察することであった。

2019年度には、オーストラリアで活動するグループ、日本でハカを演じる踊りのグループ、ハカを演じる部活を有する高校、そしてニュージーランドの軍隊を対象に調査を行った。

マオリの歌や踊りは部族ごとの歴史を演じるため、マオリ民族内部でさえ、部族の境を超えて実践することが望ましく考えられていない。民族の壁を超える以前に、部族間の壁をいかに超えているのかを明らかにする必要がある。オーストラリアで活動するグループでは、現在を共有する人々というつながりを意識していた。それは、故郷を離れて暮らすマオリとして手を取り合おうとする精神の現れであった。

ニュージーランドの軍隊でも様々な出身部族の人が活動をしているほか、非マオリの参加者もいた。オーストラリアでの事例とは違い、軍隊はその組織が独自の歴史を持っていることから、他者という壁を乗り越えて一つになることに大きな問題は生じていないようだった。

日本でハカを演じる踊りのグループは、ニュージーランドから移住したマオリの他に、マオリ文化に惚れ込んだ日本人やニュージーランドで育った太平洋諸島民が参加していた。このグループではそれぞれが共有する歴史は少なく、多種多様な立場があるため現在を共有しているとも言い難い。マオリ文化に対する愛情を共有する人々が集まってきており、その結果、マオリの歴史を歌うのではなく、人類皆一つという歌や踊りを作り出すことで、多種多様な人々をまとめ上げていた。

他者を許容する論理として、参加者の共有するものを見出し、それに基づいた歌や踊りを演じるという方法があるようであった。